

「
タ
イ
ト
ル
」
第
2
話

水
瀬
真
理
佳

○ 高校・教室

生徒がそれぞれ机を向かい合わせてお
昼を食べている。

えま、桃香の前で嬉しそうにお弁当を
食べ進める。

桃香「えまなんか嬉しそうじゃん。いいこと
でもあったの？」

えま「：：うん。（小声で）実はね、陽斗く
んがしばらくうちに住むことになったの」

桃香「へえ、陽斗くんがねえ：：」
桃香、頷きながら箸の手が止まる。

桃香「は!? ちょっと! とうとう現実と妄
想の区別もつかなくなっただ!? ヤバイ薬と

かやってないよね? 大丈夫?」
桃香、立ち上がってえまの肩を掴む。

えま「ちよっと。親友を薬中みたいに言わ
ないでよ」

桃香「だって：：はいそうですかなんて言え
ないでしょ! 陽斗くんって、田中の陽斗

くんでしょ? えまの推しの!」

えま「そうだよ。田中の陽斗くん。私の推しの。（小声で）なんか住む家がなくなっちゃったらしくて、パパが急に連れて来たの」
桃香「何その『捨て犬拾ってきました』みたいなノリは！ 何でそんな冷静でいられるの!? 推しでしょ！ キャーキャーするでしょ普通！ えまは今、推しと同棲してるんだよ!？」

えま「シューシューッ！（小声で）ちょっと！ 安易に同棲とか言わないで！ 誰に聞かせるか分かんないんだから！ 特に紗耶香に聞かれたら：：」

えまと桃香、そーっと小林紗耶香（17）の方を見る。
紗耶香、窓際の席で友達と会話している。

桃香「ごめんごめん。紗耶香もえまと同じ田中担だったね」

えま「（頷きながら）紗耶香は同担拒否だから、もし陽斗くんがうちにいるなんて知られた

ら……ヤバいもん！」

えま、身震いする。

桃香、頬杖をつきながら、

桃香「でもさあ。話戻すけど、私だったらも
っと舞い上がっちゃう。あわよくば田中さ
んといいい感じになったりとか期待しちゃ
うなあ」

えま「桃香はリアコタイプだもんね。私はリ
アコではないからかな。それに、私が家で
キャーキャーしちゃったら、陽斗くん的心
が休まらないでしょ？ だから、陽斗くん
の前では絶対にオタクを出さないようにし
ようって決めたの！」

桃香、拍手する。

桃香「えま、すごいよ。あなたはオタクの鑑
だ！」

えま「ま……まーね！」

えま、食べ終えた弁当の蓋を閉める。

○ 同・廊下

えまと桃香、話しながら歩く。

桃香「ていうかさ。そもそもなんでえまのパパが田中さんを連れて来たの？そこはど
ういう繋がり？えまのパパってなんの社
長さんなんだっけ」

えま「ああ、なんか人材派遣会社だっけな：
：よく知らないんだよね」

桃香「苦笑」知らないって：：もう少しパ
パに興味もってあげてよ」

えま、廊下の奥を見て立ち止まる。
工藤真斗（18）が友達と歩いてくる。

工藤、えまに気づいた顔。

桃香も工藤を見つける。

桃香「顔色を変えて」えま、行こ！」

えま「あ、ちよつと：：！」

桃香、えまの手を引いて、逆方向へず
んずん進む。

桃香「怒りながら」あーもう最悪！嫌な人
に会っちゃったね！えま大丈夫？」

えま、歩きながらチラッと後ろを振り

返る。悲しげな表情の工藤と目が合う。

えま、すぐに目を逸らし、

えま「う、うん……」

○テレビ局・楽屋

ユニクラウンのメンバー、座ってお菓

子を食べながら談笑。

柊也「それで陽斗。新居はどうよ？」

陽斗「新居じゃなくて仮住まいな」

翼「住んでたマンション追い出されるって何

そのドラマみたいな展開！陽斗お前もっ

てるのかもってないのか分かんないな」

悠真「社長の娘さんって高校生だよね？ど

んな子なの？」

陽斗「……それが、ユニクラのファンで……」

メンバー「ええっ!？」

柊也「それ絶対社長わざと黙ってたって。前

に、思春期で娘が冷たいって言ってた！」

悠真「じゃあはるピーは娘さんのご機嫌とる

ために社長に利用されたってこと？」

翼「ちなみに誰担なん？」

陽斗「：：俺」

翼「お前かーい！」

柊也「そしたら陽斗、家帰っても気持ち的に

あんま休まらないんじゃない？大丈夫？」

悠真「確かに。サインちようだいか写真撮

ってとか言われた？」

陽斗「そこらへんは心配ないと思う。(えま

の真似して)『私はアイドルの田中さんの

顔と体にしか興味ないので！』って、結構

ハッキリ言われたから：：」

翼「ウケる！家にいる田中陽斗は興味な

いんだ！おもしろいな」娘さん。俺も会っ

てみたいわ」

○(陽斗の想像)宮本家・リビングダイニン
グ

陽斗がユニクラウンのメンバーを連れ
てくる。

ユニクラウン「初めまして！ユニクラウン

です！」

えま、失神して後ろに倒れる。

○同・楽屋

陽斗、クスッと笑う。

悠真「はるピーなに笑ってんの？」

と、からかう。

陽斗「いや、なんでも」

凜太郎「(ニヤニヤしながら)今その子のこと

考えてたんじゃなくない？」

翼「マジい？お前人見知りなのにもうそんな

な仲良くなつたのかよ！」

陽斗「んなワケ。JKなんて何話せばいいか

分かんないし。今日もエレベーターの中気

まずすぎて地獄だった」

凜太郎「そんなの簡単だよ」『今日学校で何

したの？』とか『休みの日は何してるの？』

とか。あと恋愛トークしてればなんとかな

る！」

陽斗、目を細めながら凜太郎を見る。

柊也「それができれば苦労しないんだけどな」

悠真「だね」

翼「でも俺らの大事なファンなんだから、嫌

われないようにしろよ」

と、茶化する。

柊也「翼！ あんま陽斗にプレッシャーかけ

んなって」

凜太郎「そうだよ。ソルトプリンスに失礼な

こと言わないの！」

悠真「凜も、はるピーのことおもちゃにする

なって」

陽斗、不貞腐れながらため息をつく。

○宮本家・リビングダイニング（夜）

陽斗、リビングに入ってくる。

宮本と美香、ソファに座ってワインを

飲みながら洋画を観ている。

美香「陽斗くんおかえり！」

陽斗「ただいまです」

宮本「おつかれーライス！」

陽斗、失笑して宮本を無視。

宮本「おい！　なんか言えよ！」

陽斗「……あれ、えまちゃんまだ帰ってないんですか？」

宮本「えまちゃん……？」

宮本、陽斗を鋭く睨む。

陽斗「……お嬢さん、まだ帰ってないんですか？」

美香「お店が21時までだから、いつも帰ってくるのが22時前くらいなのよ」

陽斗「そうなんですネ」

美香「陽斗くん良かったら冷蔵庫の中の桃食べせてね」

陽斗「ありがとうございます」

○同・玄関（夜）

えま、ドアを開けて帰って来る。

えま「ただいまー！」

玄関には陽斗の靴が並んでいる。

えま、靴に向かって二礼してしゃがみ

込む。胸の高さで二拍手して目を閉じる。

えま「今日もお疲れ様です」

えま、目を開けて立ち上がり、一礼する。

美香が玄関に顔を出す。

美香「おかえりえま。お風呂入っちゃってね」

えま「はい」

えま、部屋の方へ向かう。

○同・リビングダイニング（夜）

えま、ソファでカーリーと戯れる。

スリッパの音が聞こえて陽斗がダイニングに入ってくる。

陽斗「あ……おかえり」

陽斗、上半身裸で首からタオルをかけ、スウェットを履いてTシャツを手に持つている。

えま「ただい……ま……です」

えま、陽斗の頭から足の先までをまじ

まじと見つめる。

えま「ストップ！ はい！　そこで止まって

ください！」

陽斗「……え？」

えま、顔を両手で覆うが隙間から陽斗を見つめる。

陽斗、自分の姿を見る。

陽斗「あ……ごめん！　つい癖で……」

陽斗、慌てて持っていたTシャツを頭から被る。頭を通したところで、スマホで写真を撮ろうとしてるえまに気づく。

陽斗「ちよいちよいちよい」

陽斗、えまの方に歩いて行って、えまのスマホのレンズを手で隠す。

えま、我に返って、

えま「すみません！　私としたことが！」

えま、恥ずかしそうにスマホを仕舞う。

陽斗「……そういえば、こういう感じの撮影少し前にしたな……」

えま「(食い気味に) はい！ 今月の雑誌です

ね！ 載ってました！ 見ました！ 三冊

買いました！」

陽斗「え、三冊も？」

えま、指折り数えながら、

えま「だって、閲覧用でしょ。あと飾る用、

それから万が一何かあった時のための保存

用！ いつも三冊は最低ラインです！ 本

当はもっと買ってみんなに配りたいくらい

です！」

えま、満足そうに言い切る。

陽斗、呆気にとられる。

えま、陽斗を見て顔を青ざめる。

えま「ごめんなさいっ！」

えま、ソファの上で土下座する。

陽斗「え……今なんで謝られてんの俺」

えま「だって……めっちゃオタク出しちゃっ

たから……」

陽斗「……ファンに喜んでもらえて嫌がる奴

なんていないでしょ。少なくとも、俺は嬉

しいし。そういうの、もっと頑張ろうって
思えるよ」

陽斗、えまに近づいて、
陽斗「：：いつもありがと」

陽斗、ぎこちなくえまの頭に優しく手
を置いてリビングを出る。

えま、両手を頭に乗せてきよとんとす
る。そのままソファに倒れ込んでフリ
ーズ。

えま「桃香。やっぱり私、ダメかも：：」
えま、うつ伏せになって足をバタバタ
させる。

○ 同・廊下（夜）

陽斗、廊下の真ん中にしゃがみこむ。
自分の手のひらを見つめながら、絶望
する。

○（陽斗の想像）同・リビングダイニング

（夜）

えま、ソファに座って涙を流す。

えま「あんなの陽斗くんじゃない……陽斗くんはあんなことしない！」

○（陽斗の想像）同・えまの部屋（夜）

えま、手を叩きながら大笑いする。

えま「やばー！　頭ポンとか古すぎー！」

○同・廊下（夜）

陽斗、恥ずかしそうにタオルで髪を拭く。

陽斗「どっちもキツイな……」

陽斗、立ち上がってよろよろ部屋に戻る。

○カフェ・店内（夕方）

学生や社会人で満席の店内。

学校帰りのえまと桃香、クリームが乗

ったドリンクを飲んでいる。

えま、言いづらそうな顔で、

えま「：：もう私の心臓がもちそうにありま
せん。やっぱりキャーキャー言いたいで
す！」

えま、テーブルに項垂れる。

桃香、満足そうに頷きながら、

桃香「そうでしょう、そうでしょう。それ
で？　どうなの田中さんとの暮らしは。二
人はなんて呼び合ってるの？」

えま「私は普通に田中さんって呼んでて、陽
斗くんは：：私、呼ばれたことないかも：
：」

桃香「ええっ!?　カタ！　つまんな！　な
んで陽斗くんって呼ばないの!？」

えま「ムリムリ絶対ムリ！　本人に直接
陽斗くん呼びはしんどいって！」

桃香、えまの手を握って囁く。

桃香「ねえ、えま？　もうこんな機会二度と
訪れないよ？　この先何度生ま変わっても
絶対ムリ。名前くらいどうってことないじ
ゃん！　えまが呼べば、田中さんもえまの

こと呼んでくれるかもよ？ どう？ 『え

ま』って呼ばれたくないの？」

えま、泣きそうな顔で大きく頷く。

えま「……呼んでほしいですっ！」

桃香「じゃあ頑張ってる！」

と、にっこり笑う。

○宮本家・リビングダイニング（夜）

えま、ソファに座ってドラマを見てい
る。

カーリー、えまの隣に丸まって眠る。

陽斗、リビングに入って来て、テレビ

画面を見ながら、

陽斗「そっか、今日放送か」

えま、驚いて振り返り、慌ててテレビ
の画面を全身で隠す。

えま「ごめんなさい！ はる……田中さんま

だ帰ってなかったの……！」

陽斗「いいよそんな気遣わなくて。ていうか

俺もオンエアチェックしたいし、見る時俺

もいたら声かけてよ……ちよつと恥ずいけど

えま「……それは丁重にお断りさせていただ
きます」

と、頭を下げる。

陽斗「……え!？」

えま「私はファンとして見たいんです！
は……田中さんが隣にいと緊張してそれ

どころじゃないというか……落ち着かない
っていうか……だからごめんなさい！」

陽斗「……一応確認なんだけどさ。俺のファ
ン……なんだよね？」

えま「はい！ファンです！だからムリな
んです！」

えまと陽斗、真剣に見つめ合う。

陽斗、両手を挙げる。

陽斗「……分かった。俺の負け。風呂入って
来る」

えま、陽斗が見えなくなったのを確認
して自分の頭を抱えてソファに倒れ込

む。

えま「ああー！今の感じ悪かったよね：
でも本人の隣で一緒に見るとか、隣が気
になつて集中できないよお！」
えま、寝返りを打って、
えま「しかも名前呼べなかった……」
と、呟く。

○公園・芝生

撮影クルーに囲まれてドラマの撮影。
陽斗と木村千尋（39）、レジヤースート
に座ってピクニック。
千尋、サンドイッチをひと口食べる。
陽斗、千尋の口の端についたソースを
指でとって舐める。

陽斗「んー！うまい！」

千尋「ふふっ」

見つめ合う二人。

監督「はいカットー！オツケー！」

スタッフが二人に駆け寄り小道具を回

収。

陽斗「このサンドイッチ食べていいですか？」
スタッフ「どうぞどうぞ」

千尋「私もかじったの食べちゃおう」

千尋、食べかけのサンドイッチを食べる。

千尋「なんかこのままオシヤレなカフェとか
でテイクアウトしたコーヒー片手に、のん
びり日向ぼっこでもしたいねえ」

陽斗「ですねえ」

千尋「田中くん今絶対休みなしでしょ？ 毎
日テレビで見る気がするよ」

陽斗「それは俺のセリフです。木村さん、毎
クルドドラマ出てらっしゃるじゃないです
か」

千尋「たまたまよ、たまたま！ 田中くん他
のドラマとかよく見るの？」

陽斗「見ますね。色んな人の演技見て勉強し
たくて。木村さんはあんまり見ないです
か？」

千尋「努力家！ えらい！ 私もねえ、昔は色々見てたんだけど、今は逆に自分がブレちゃう気がしてダメなの。自分の演技とかも絶対見れない！ なのに旦那は平気で『一緒にみよ〜』とか言ってくるの！ 私のが嫌がるの知っててわざとするの！ どう思う!？」

陽斗「確かに自分の前で見られるのはちょっと恥ずいっすね：：でも木村さんの旦那さんが嫌がるのは分かるけど、一緒に見たくないって言われることってないですよね!？」

千尋「それはないかな〜（ニヤニヤしながら）田中くん、彼女に拒否られてるのおく？」

陽斗「ハッキリ断られたんですよ：：あ、彼女じゃないですかからね！ 知り合いとか：：親戚の子的な？」

千尋「（ニコニコしながら）ふうん。そっかそっか」

陽斗、千尋を見つめる。

陽斗「絶対勘違いしてる」

スタッフ「お待ちたせしました！移動お願いします！」

陽斗と千尋、立ち上がったって移動する。

○道路・車内（夜）

佐藤が運転する車内。

陽斗、後部座席から窓の外を眺める。

陽斗「あ。ごめん、ちょっと停まれる？」

佐藤「はい」

佐藤、車を路肩で停車させる。

佐藤「どうしたんですか？」

陽斗「今日ここで大丈夫！」

佐藤「え？社長の家までもうすぐですよ？」

陽斗「うん。ちょっと寄りたい所あって」

佐藤「じゃあここで待ってますね」

陽斗「いいいよ。歩いて帰れるし。珍しくまだそんな遅くないから、こんな日くらい早く帰ってゆっくり休んで」

佐藤「いや、でも……」

陽斗、車から降りる。

佐藤、窓を開けて、

佐藤「何かあったらすぐ連絡してくださいね」

陽斗「（笑いながら）なんもないって。お疲

れ！」

佐藤「お疲れ様です」

陽斗、車を見送る。

○カフェミラベル・店の外（夜）

ドアの外には季節のドリンクの絵が描

かれた立って看板が置かれている。

陽斗、中の様子を覗く。

中から大島勇輝（17）が出てくる。

勇輝「あの、中にもメニューあるのでよろし

ければ」

陽斗「あ……ありがとうございます」

陽斗、帽子のつばを下げて店内に入る。

○同・店内（夜）

店内は30席ほどで、木のぬくもりが感

じられる落ち着いた内装。中はほぼ満席。

陽斗、レジの前でメニューボードを見る。

勇輝「お決まりでしたらお伺いします」

陽斗「これお願いします」

陽斗、季節のドリンクを指さす。

勇輝「600円になります」

陽斗、支払いをする。

勇輝「左手のお渡し口でお並びください」

陽斗「はい」

と、移動する。

えま、お渡し口でドリンクを作っている。

陽斗を見てギョツとして作業の手

が止まる。

綾乃「えまごめんホイップ取って」

吉村綾乃（19）、えまの隣でドリンクを

作りながら声をかける。

えま「あ、はい！」

えま、ホイップを渡す。

綾乃、ドリンク二つにホイップを乗せて蓋を閉める。

綾乃「お待たせしました」

綾乃、女子大生二人にドリンクを渡す

女子1「カワイイ！」

カップにはエプロンを着たクマの絵と

【thank you】のメッセージ。

綾乃「笑顔で」ごゆっくりどうぞ」

女子大生二人、席に行く。

綾乃「えま、次の方お願いね」

と、バックヤードに入る。

えま「え！ちょっと先輩！」

えま、慌てる。

陽斗、お渡し口に来る。

陽斗「俺もさっきの子たちみたいなのお願い

します」

えま「（小声で）なんでこんな所いるんですか

!? お客さんに気づかれますよ!? 早く帰

ってください！」

陽斗「だってもう金払っちゃったし」

陽斗、カウンターに肘をついてえまを見つめる。

えま「その顔はズルいってえー！」

えま、諦めてマジックでカップに絵を描き、ドリンクを作って陽斗に渡す。

えま「：：お待たせしました」

陽斗、カップを回してイラストを見る。個性的なクマの絵が描かれている。

陽斗、クスッと笑う。

えま「あ、今笑った！返してください！」

えま、ドリンクを取り上げようとするが、陽斗にあっさりかわされる。

陽斗「ありがとう」

陽斗、悪戯っぽく笑い壁際の席に座る。テーブルにドリンクを置いて写真を撮る。

えま、その様子を見て口角を上げる。

勇輝「何ニヤニヤしてんだよ」

えま「に!?ニヤニヤなんてしてないし！」

勇輝、陽斗を見ながら、

勇輝「なんか話してたけど、あの人知り合
い？」

えま「いやあ？別に！」

えま、テーブルの片づけに行く。

勇輝、えまを見ながら、

勇輝「変な奴」

と、呟く。

○同・バックヤード（夜）

えま、勇輝、綾乃が荷物をまとめなが
ら話している。

舞「お疲れ様。みんななんか食べて帰る？」

坂本舞（32）が声をかけにくる。

綾乃「はい！」

勇輝「よっしゃラッキー！」

えま「すみません。今日は大丈夫です！」

舞「あら。気を付けて帰ってね」

えま「はい。お疲れ様です！」

舞、えまに手を振りながら店に戻る。

えま、スクールバッグを肩にかける。

綾乃「不審者多いからほんと気を付けてね。

何かあったら勇輝が助けに行くから電話して！」

勇輝「何で俺なんですか」

と、綾乃に突っ込む。

勇輝「まあでも、あれだったら家まで送るけ

ど……」

えま「家近いから大丈夫。勇輝は先輩のこと

お願いね」

えま、期待する眼差しで勇輝を見る。

勇輝「……へいへい」

綾乃「私なら大丈夫！ ナンパとかも全然さ

れたことないから。私なんかにかけるも

の好きはないよ」

勇輝「不審者っていうのは大体みんなそうい

う”もの好き”なんですよ」

綾乃「今のは『そんなことないですよ』って

フオロ―するところだから！ 意地悪なこと

ばっか言ってるよね、モテないよ！」

勇輝「俺の心配より自分の心配してください」

綾乃「ムカつくう！ えまからもビシツと言
ってよ！」

えま、クスクス笑いながら、
えま「邪魔者は退散しまーす。お疲れさまで
した」

勇輝「手を挙げて」お疲れー」

綾乃「ちよっとえまー！」

○同・店の外（夜）

えま、裏口を出て店の脇を通る。
入口脇に人影。

えま、人影をチラッと見て叫ぶ。

えま「キャアッ！」

えまの声が大きく響く。

陽斗、慌ててえまの口を両手で塞ぐ。

陽斗「小声で」しーっ！ 俺だよ俺！」

えま、顔を赤くして息を止める。

陽斗、ゆっくり手を離す。

えま「（小声で）不審者かと思いました！ 驚

かせないてくださいよ！」

陽斗「そんな驚くとは思わないじゃん？」

と、歩き出す。

えま「待ってください！ 私制服ですよ!？」

撮られたらマズイです！」

陽斗、少し考えて、

陽斗「：：じゃあ俺は後から行くわ」

えま「：：じゃあ、先に行きますね」

えま、歩き出す。

○大通り・歩道（夜）

えま、後ろを気にしながら、

えま「なにこの状況：：」

と、歩く。

ポケットのスマホが震える。

えま、スマホの画面を見ると知らない

番号からの着信。

えま「：：もしもし？」

陽斗の声「もしもし」

えま、立ち止まって後ろを振り向こうとする。

陽斗の声「あーコラ！ こっち向いたらダメじゃん」

えま、振り返るのをやめる。

陽斗の声「これなら週刊誌対策もばっちりでしょう？」

えま「フフツ。そうですね」

えま、再び歩き出す。

陽斗の声「俺が美香さんから番号聞いたこと、お父さんに内緒にしといてね。絶対ネチネチ言われるから」

※ ※ ※
(フラッシュ)

宮本「なーんで陽斗がえまの番号知ってんの？ 必要ないでしょ！ ほら、スマホ出せ！ 今すぐ消すから！」

※ ※ ※
えま、クスクス笑う。

えま「それすごい想像できます」
陽斗の声「俺も」

○大通り・反対側の歩道（夜）

陽斗、えまを見ながら数メートル後ろを歩く。

えまの声「私のバイトが終わるの待っててくれたんですか？」

陽斗「：：この時間に女子高生一人で歩くのはあんま良くないでしょ」

えまの声「もしかして、それでわざわざカフェに来てくれたんですか!？」

陽斗「：：別に。それはたまたま喉渴いたから寄っただけ」

えまの声「（嬉しそうに）んふふ」

陽斗「：：なに？」
えまの声「：：なんでもないです！」
陽斗、照れ臭そうにする。

えまの声「は：：田中さん夜ご飯食べましたか？」

陽斗「うん。現場で弁当食べた」
えまの声「いいいなぁロケ弁！　なんだったん

ですか？」

陽斗「オーブルジーネってとこのカレー」

えまの声「それ知ってます！ 芸能人に人気
なんですすよね！ やっぱり美味しいんです
か？」

陽斗「うん、美味しいよ。俺のオススメはエビ
カレー」

えまの声「へえー！ 今度食べてみますね！」

○宮本家・玄関（夜）

えまと陽斗、一緒に玄関に入る。

えまと陽斗「ただいまー！」

美香が出迎える。

カーリーも走って来る。

陽斗「おー！ よしよし」

と、カーリーを撫でる。

美香「おかえりー！ あら、二人一緒だった
の？」

えま「えまと陽斗、顔を見合わせながら、
えま「たまたま……ですよね」

陽斗「うん。たまたま、ね」

美香「（ふくん）」

美香、にっこり笑って二人を見る。

○同・廊下（夜）

えま、自分の部屋に入ろうとする。

陽斗「：：あのさ、ずっと気になってたんだ

けど」

えま「はい：：？」

陽斗「最近結構俺の名前呼び直すよね？」

『はる：：田中さん』って」

えま「：：（とぼけて）そうでしたっけ？」

たまたまじゃないですか：：？」

陽斗「その田中さんっていうのやめない？」

なんか距離感じるし。そんなかしこまらな

くていいよ」

えま「：：だって、他に呼びようがないです

もん！」

陽斗「普段俺のことはなんて呼んでんの？」

えま「それは：：秘密です」

陽斗「分かった！変なあだ名つけてんだ

ろ？」

陽斗、疑いの目でえまを見る。

えま「そんなわけないじゃないですか！」

陽斗「じゃあ何？」

えま「(投げやりに)はるピーです！ はるピ

ーって呼んでます！」

陽斗、えまに詰め寄る。

えま、一歩ずつ後ろに下がり、部屋の

ドアに背が当たる。

陽斗、えまに壁ドンをして顔を近づけ

る。

えま、ギョツと目をつぶって手で顔を

覆う。

陽斗「ほら、早く言いなよ」

えま「……陽斗くんって、呼んでます……」

陽斗、フツと笑って顔を離す。

陽斗「じゃあそれで！ 俺はえまって呼ぶ」

えま「ええっ!？」

陽斗「ダメ？」

えま「いや、ダメじゃないですけど……私は

田中さんって呼びますから！」

陽斗「無理」

えま「田中くん！」

陽斗「却下」

えま「……もう！ 大人気ないですよ！」

陽斗、無視して自分の部屋の方へ行く。

えま「あ、ちよっと！ 逃げるのはズルい！」

田中さん！」

陽斗、振り返らない。

えま「ああもう！ ……陽斗くん！」

陽斗、ドアノブに触れて振り返る。

陽斗「勝ち誇った顔で」なに？」

えま、恥ずかしそうに陽斗を見るめる。

えま「あの……ドラマとか見るとき……声、

かけますね。うちテレビ一つだから同じの

見るなら一緒に見た方が、ほら！ 電気代

節約になるし！」

陽斗「優しい笑顔で」わかった。おやすみ、

えま」

えま、ドキッとする。

陽斗、部屋に入りドアが閉まる。

えま「おやすみ……な、さい」

と、眩く。

○同・えまの部屋（夜）

えま、部屋の中に入って両頬に手を添

える。

えま「あれはズルいよ……！ 惚れちゃうじ

ゃん！」

えま、ずるずると床に座り込んで胸を

押さえる。

○同・陽斗の部屋（夜）

陽斗、部屋に入ってベッドに横になる。

陽斗「本当に俺のこと好きなんだなあ」

と、隣の壁を見る。

陽斗「いや、好きなのは『ユニクラウンの田

中陽斗』か」

と、苦笑。

○ 高校・教室

生徒、それぞれ固まってお昼を食べている。

えまと桃香、机を向かい合わせて話し合い。

桃香、真剣な顔で机に肘をついて両手を握る。

桃香「えま、ついにこの時期がやってきたね
：
：
」

えま「うん：：！」
えまと桃香、お互いのスマホのスケジュール画面を開き机に置く。

えまと桃香「私たちの推しの誕生日！」

同じ日に「陽斗くんBD」「亜蘭くんBD」と表示。

桃香「とりあえずカラオケ二部屋予約はバッチリ！」

えま「隣の部屋で祝えるね！」

桃香「ケーキはもう決まってるし、あとは飾りつけと：：：」

桃香、スマホを見ながら呟く。

えま、桃香を見つめる。

桃香「ん？なに？」

えま「懐かしそうに」いや。去年のこと
思い出してさ」

桃香「あー！あの時はほんと焦ったよ。ま
さかえまがいるとは思わなかったからね」

○（桃香の回想）カフェ・店内（夜）

桃香 M「中学の頃、苦い思いをしたことがき
っかけで、それ以来私は自分がオタクだと
いうことを周りに隠していた。もちろんそ
れは、高校でできた親友・えまにも……」

えま（16）、陽斗のアクリルスタンドと
ドリンクの写真を撮っている。

桃香（16）、その様子を切なそうに見つ
める。

えま、桃香の視線に気づいて、
えま「あ……ごめんね勝手にオタ活しちゃっ
て」

桃香「ううん。全然気にしないで！」

えま「桃香もぜひユニクラ担に。いつでも歓迎だよ」

桃香「作り笑顔で」：：ありがとう

えま「そうだ、聞いてよ桃香！」

桃香「ん？」

えま「今年ユニクラが三周年なんだけど、私のオタ友みんな地方の子だから一緒にお祝いできないの！本当はホテルの部屋とか借りてやりたかったんだけど、さすがに一入だと割高だし：：ごめんね陽斗くん。こんな私を許して：：」

と、手を合わせて祈る。

桃香「いきいきと」最近カラオケとかも推し活プランとかやってる所多くて、値段もわりとお手頃だよ！飾りとかも貸してくれたり、プランによってはハニートーストとかもついたりするからオススメ！そう言うの探してみたら？」

えま、驚いて目が点になる。

桃香「（慌てて誤魔化すように）……って、テレビの特集でやってたの！　すごいんだねえ、推し活って！」

えま「そうなんだ……」
と、桃香を見つめる。

○（桃香の回想）カラオケ・廊下

桃香（16）が一室から出てくると、廊下にはえま（16）がいる。

えま「桃香！　偶然だね！　もしかしてひとカラ？」

桃香「あ、えーっと……」

桃香、ギョツとスカートを握る。

えま「私ね、桃香が教えてくれたプランでユニクラのアニバーサリーーすることにしたんだ！　ボッチだけどね」

桃香、無言のまま。

えま「……じゃあ、また学校でね！」

えま、自分の部屋に入ろうとする。

桃香、拳をギョツと握りしめて口を開

く。

桃香「待ってえま！」

えま、桃香の方を見る。

えま「？」

桃香「：：私もね、今日推しのお祝いで来たの。知らないと思うけど、亜蘭くんってキヤラクターで、本当は誕生日9月30日だから過ぎてるんだけど、まだお祝いできてなかったから：：今日一人で振替パーティーしてるの：：」

桃香、えまの反応を伺う。

えま「それほんと!? 陽斗くんも誕生日同じだよ! これって運命じゃない?」

桃香が目を開けると、にっこり笑って

嬉しそうなえま。

桃香もつられて口角を上げる。

桃香「うん！」

○（桃香の回想）同・桃香のカラオケルーム
亜蘭のイメージカラーの紫で統一され

た部屋。

えま「おゝ！」

えま（16）、感動しながら部屋の中に入る。テーブルには亜蘭の缶バッジとアクリルスタンドが敷き詰められている。椅子にはたくさんの亜蘭のぬいぐるみ。桃香（16）、テーブルの配置を調節しながら一眼レフカメラで撮影。

えま、桃香の様子を撮影して楽しむ。

えま「ねえ桃香！ 来年さ、良かったら隣同士で部屋取ってお互いの推しの生誕祭しようよ！ もちろん、各自で楽しんだ後に最後一緒にケーキ食べたりするくらいでいいんだけど」

桃香「え……」

えま「でもあれか、桃香は亜蘭くんのオタ友とかいるか……」

桃香「ううん！ 私、亜蘭推しとは全然繋がってないの！ 同担拒否まではいかないけど、自分からはあんまり絡みに行けなくて

：：結構リアコ寄りだし。だから基本いつもボツチなの：：（不安そうに）引くでしょ？」

えま「何言ってるの！引くわけないじゃん！じゃあ来年一緒にやろ！決定ね！」

桃香「うん！」

○（えまの回想）高校・廊下

桃香（16）、自分のロッカーを開ける。扉の内側には亜蘭のブロマイドやキーホルダーがマグネットで貼り付けられている。

女子「それってメロブラの亜蘭くん？桃香

好きなの？」

女子が後ろから桃香のロッカーを覗きながら話しかける。

えま（16）、離れたロッカーから桃香を心配そうに見つめる。

桃香「：：うん！実はそうなの！私かなりのオタクで」

桃香、堂々と答える。

女子「そうなんだ！私最近メロブラハマっちゃったの。ちなみに私は理玖推し！」

桃香「そうなんだ！こんな近くにメロブラの話できる人いると思わなかった！理玖もいいよねえ。私最初は理玖から入ったの」

桃香、女子と話しながら教室の中に戻って行く。

えま、安心した顔でロッカアの扉を閉める。

○宮本家・えまの部屋

えまの机の上の卓上カレンダー、9月30日に「陽斗くんBD」とハートで囲まれてる。

○同・リビングダイニング（夜）

宮本、ソファに座ってテレビを見ながらワインを飲んでいる。

美香、キッチンで料理の仕込みをしている。

陽斗「帰りました」

と、リビングに入って来る。

美香「おかえりー！」

宮本「おー陽斗！お前、誕生日何食べた

い？ユニクラで飯行くぞ！」

陽斗「（少年のような笑顔で）やった！やっ

ぱ寿司がいいです」

宮本「オーケー！寿司な！」

美香「じゃあ私もその日友達と出かけてこよ

ーっと」

宮本「でもえまが一人になっちゃうな」

美香「えまもその日は約束があるみたいよ？」

宮本「：：まさか、男か!？」

宮本、一人でパニックになる。

えま「ただいまー」

えま、リビングに入って来る。

美香「おかえり」

陽斗「おかえり！」

えま「嬉しそうに」……ただいまです」
宮本「えま！ 彼氏できたなんてパパ聞いてないぞ！」

宮本、えまに近づく。
えま、嫌そうに距離をとる。

えま「いきなり何!? 彼氏なんていませんけど！ パパなに？ 嫌味？」

えま、怒って部屋に戻って行く。

宮本「青ざめる」どうしよう……えまに彼氏……」

陽斗「まあ、いてもおかしくないでしょ。青

春真っ盛りですし」

宮本「やめろ！ 聞きたくないッ！」

宮本、耳を塞ぐ。

美香「ふふふ」
と、笑う。

○同・廊下（夜）

陽斗、自室に入ろうとすると、隣の部屋からえまが出てくる。

陽斗「9月30日って、実はほんとにデートだったり：：？」

えま「もう陽斗くんまで！だから、彼氏なんていないですって！」

陽斗「じゃあバイトとか？」

えま「はいいい!? 田中陽斗生誕祭にバイトなんて入れません！その日は学校終わってから大忙しなんですから！ダッシュでケーキ受け取りに行って、飾りつけして：：」

えま「指折り数えながらぶつぶつ呟く
陽斗「おお！」

えま「顔を赤らめて」：：すいません。つい：：」

陽斗「じゃあ帰ってきたら俺、ケーキ食べれんだ！」

えま「ケーキは私が代わりに食べますよ？それが本人不在の誕生日会です！」

陽斗「本人不在じゃない！俺ここにいるじゃん！食べれないの!? 主役なのに

!?
」

えま「言われてみれば確かに……」

陽斗「よっしゃ！　楽しみだな」

陽斗、ニコニコしながら上機嫌で部屋に入る。

○同・えまの部屋（夜）

えま、閉めたドアに寄りかかる。

えま「そっか……私、直接陽斗くんのお祝い

できるんだ！」

と、部屋の中を飛び回る。